

第9章 総括

出雲インター線建設に伴う発掘調査は、平成15年度に浜井場2号墳の調査を実施し、平成17年度から本格的に着手した。平成19年度までに10箇所の遺跡の調査を行い、数多くの貴重な成果が得られた。出雲平野南西部に位置する神西湖周辺の縄文時代～古代にかけての様相については今までその実態が不明瞭であったが、今回の調査でその一部が徐々に明らかとなってきた。全体像を捉えることはできないとしても、調査成果としては九景川遺跡や御崎谷遺跡を中心とした出雲平野における古墳時代中期前半頃の集落の一端が明らかになってきた点、間谷東古墳や浅柄北古墳など出雲平野では数少ない古墳時代前期～中期初頭の古墳の出現、出雲平野における出現期の横穴墓の様相などがあげられる。ここでは、本書に掲載した遺跡を中心に出雲インター線発掘調査で得られた成果に基づいて神西湖東岸地域の特色等について若干の検討を行いまとめとしたい。

第1節 神西湖東岸地域における集落の様相

出雲インター線発掘調査で確認された遺跡の多くは集落跡もしくは集落的様相を示すものが大半を占めている。これらの遺跡は小さな谷間及びそれに接する丘陵部に立地し、その分布状況から推測すれば大雑把ではあるが4箇所の集落域が想定できそうである。九景川遺跡、玉泉寺裏遺跡、御崎谷遺跡を中心とする東神西地区、間谷西Ⅱ遺跡の存在する谷間周辺の間谷西地区、間谷東遺跡周辺の間谷東地区、今回の調査では直接的に集落跡は検出していないが浅柄北古墳の東に隣接する浅柄遺跡や南に位置する保知石遺跡の状況から浅柄地区が想定できる。周辺にはこれ以外の集落が存在していることは当然であると思われるが、その実態を明らかにすることは残念ながらできない。以下これら集落の様相について概観してみたい。

1. 縄文時代～弥生時代の様相

縄文時代では間谷西古墳群の2号墳斜面から前期の西川津式と考えられる土器が1点認められている。しかし、わずか1点であることからこの地に集落が形成されていたとは考え難いであろう。後期～晩期になると九景川遺跡と御崎谷遺跡からは遺物がある程度出土するようになり、浅柄遺跡や保知石遺跡では多量の遺物が出土している。建物跡等の明確な遺構は確認されていないが、当該期に東神西・浅柄地区の両地区で集落が出現し、特に浅柄地区では一定程度の規模の集落が存在していたものと推測される。また、この時期には神西湖南岸に位置する御領田遺跡や三部竹崎遺跡などからも多量の遺物が出土しており、神西湖周辺では比較的安定した集落が形成されていたと見ることができる。

弥生時代に入っても浅柄地区では弥生時代を通して遺物が出土しており、中小規模の集落が継続的に営まれていたようである。東神西地区では前期の遺物は九景川遺跡の土器棺しか今のところ認められず、縄文時代に形成され始めた集落は小規模化もしくは調査区外の丘陵縁辺部に移動していた可能性も考えられる。中期以降になると遺物は徐々に認められるようになり、集落が存在していたことが予想されるものの、それは極めて小規模なものであったと推察される。後期になると全体的に遺物は増加する傾向にあり、居住域は確認できなかったが、集落は拡大する過程にあったと考えられ、御崎谷遺跡でS X 0 1などの土坑状遺構がこの時期に形成されており、玉泉寺裏遺跡の丘陵上にも土坑状遺構が確認されていることから推測される。

一般県道出雲インター線建設予定地内遺跡一覧

調査年度	遺跡名	遺跡の内容	縄文時代	弥生時代	古墳時代	奈良時代	平安時代	鎌倉以降
平成 15 年度	浜井場 2 号墳	古墳時代中期の小規模な方墳 1 基を調査 2 段堀の墓壇に石列区画溝と想定される落ち込み 鉄刀片ほか鉄片出土						
平成 17 年度	九景川遺跡	縄文時代～中世の集落遺跡。古墳時代中期、8～9 世紀の建物跡を 多数検出。古墳時代中期の自然河道における土器祭祀、中世の 小規模貝塚など						
平成 17 年度	玉泉寺裏遺跡	弥生時代終末～古墳時代前期の木棺墓 丘陵頂部に立地する古墳時代中期の竪穴住居、 古代の集落など						
平成 18 年度	御崎谷遺跡	縄文時代～古代の集落遺跡 加工段や掘立柱建物跡を検出 古墳時代前期～中期を中心とする多量の土器が出土						
平成 18 年度	浜井場 4 号墳	地滑り等の影響により埋葬施設は確認できず						
平成 18 年度	間谷東古墳	奥才型木棺を有する古墳時代前期末～中期初頭の小型古墳 刀子出土						
平成 18 年度	間谷東遺跡	古墳時代前期～中世の土器が出土 建物跡は不明						
平成 19 年度	浅柄北古墳	メイン主体は不明であるが、土器棺を伴う前期古墳 1 基 古墳下方の斜面から横穴墓 8 穴検出						
平成 19 年度	間谷西Ⅱ遺跡	古墳時代前期の加工段 2 棟 自然流路から古墳時代～中世の土器が出土						
平成 19 年度	間谷西古墳群	3 基の古墳を調査したが、埋葬施設は確認できず 縄文時代～古代の遺物が少量出土						

出雲平野では弥生時代中期以降になると平野中央部や北部では大規模な集落が増加する傾向にあり、東神西・浅柄の両地区では拡大する傾向は認められるものの大規模集落としての様相はまだ見られない。神西湖周辺でも後期後半以降に三部竹崎遺跡や三部八幡下遺跡などでも遺物が確認され、西安原遺跡では木道も検出されていることから、この地域の集落も他地域同様に増加する傾向を示している。

2. 古墳時代の様相

出雲平野中心部では弥生時代から古墳時代前期中葉までこの地域の核となる大規模な集落が存在していたが、その後は急速に衰退し、中期に復興するまで一時的に空白期を迎える。当該期の集落は神西湖周辺地域と斐伊川水系の北山周辺や塩冶地域に移動や再編成が行われると見られているものの、明瞭な集落跡の検出例が乏しいのが現状である。そして後期になると平野中心部は再び活性化して本格的な集落が営まれると理解されている。

神西湖東岸地域では古墳時代に入ると遺物の量は飛躍的に増大するが、それに伴う遺構は少ない。また、間谷西・間谷東の両地区にも集落が出現し始め、間谷西地区では間谷西Ⅱ遺跡から加工段2棟が確認され、間谷東地区では遺構は認められないものの少量の遺物が出土していることから付近に集落の存在を予想させる。しかしながら集落としては古墳時代を通して小規模のものであったと考えられる。

東神西地区の前期の様相としては御崎谷遺跡の土器だまりと玉泉寺裏遺跡の竪穴住居1棟があげられる。この土器だまりは何らかの祭祀行為によって形成されたものと考えられ、中期までの遺物が多量に出土している。この状況から想像すれば丘陵縁辺部で集落は営まれ、中期まで祭祀行為が継続して行われたものと理解される。中期になると九景川遺跡でも本格的に集落が営まれるようになり、確認された遺構も増加している。御崎谷遺跡の土器だまりにおける多量の土器や九景川遺跡の集落のあり方から推測すれば、当該期には九景川遺跡から御崎谷遺跡を含む周辺に大規模な集落が展開されていたものと想像できる。浅柄地区では浅柄遺跡から前期後半～中期にかけての竪穴住居などが検出され、保知石遺跡でも遺物が確認されていることから、集落は継続的・安定的に発展していたとみられるが、集落構造等については把握できていない。

また、神西湖東岸地域では前期～中期にかけて山地古墳や浅柄Ⅱ古墳、間谷東古墳、浅柄北古墳などの出雲平野では数少ない前期中葉～中期初頭の古墳が築造され、中期中葉には御崎谷遺跡の南側丘陵に出雲部最大級の北光寺古墳が築かれている。このことは前期中葉には古墳文化を受容する集落が形成され、中期には大規模な古墳を築くことのできる有力集団・大規模集落が成立していたと理解できようが、その出現の背景や集落構成等の解明にはほど遠い状況である。しかしながら、当該期の神西湖周辺地域は出雲平野の中で中心的な地域であったことはほぼ間違いないであろう。

後期になると遺物、遺構とも中期より減少する傾向が認められるものの、東神西・浅柄両地区とも集落は継続して営まれていたと考えられる。浅柄北古墳では横穴墓が築造され、周辺では神門横穴墓群や宝塚古墳など後期の古墳や横穴墓が多数築かれていることは興味深く、神西湖東岸地域では集落が飛躍的に増加・拡大していたことを物語る事象である。

3. 古代～中世の様相

古代～中世の東神西地区では集落の中心は九景川遺跡に移るものと理解され、遺構・遺物が密に認められている。浅柄地区でも多数の建物跡が検出されていることから集落は継続して営まれてい

る。間谷西及び東地区でも遺物は認められるがその多くは流れ込みにより磨滅したものであることから、その中心は谷奥等にあるものと考えられる。

以上、発掘調査で判明した集落跡の様相について概観してみた。神西湖東岸地域は神門水海の縁辺部という地理的特性が活かされ、特に古墳時代では地域の核となる集落が出現していたと見ることができ、今後の調査・研究が進展して集落の実態等が解明されることに期待したい。

第2節 出雲平野における前期古墳の様相

インター線発掘調査で間谷東古墳と浅柄北古墳の2基の前期古墳が確認された。出雲平野において数少ない前期古墳の発見は古墳文化の受容と普及を考える上で貴重な資料であり、出雲平野の前期古墳の様相や浅柄北古墳の位置づけなどについて検討してみたい。

1. 出雲平野の前期古墳

出雲地方では安来平野や斐伊川中流域を中心に多くの前期古墳が築造されている。しかし、出雲平野に限定するとその数は少なく、前期初頭に西谷7号墳が築かれているものの、本格的な前期古墳としては斐伊川水系の北山周辺に位置する大寺1号墳と出雲平野南西部の山地古墳の2例が前期後葉になって出現することしか知られていなかった。ところが近年の発掘調査に伴い前期古墳の調査も増加し、3例の新資料が追加されることとなった。このように現在では5遺跡が知られることとなったが、それでも出雲東部に比べると少ないのが現状である。

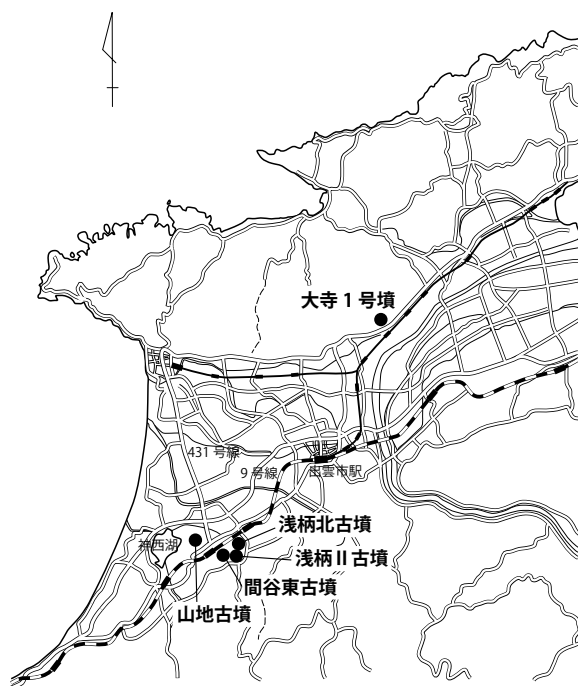
大寺1号墳は出雲平野北東の北山山系から南に延びる丘陵上の標高35m前後の尾根に立地している前期後葉の出雲地方において最も古い前方後円墳である。規模は全長約52m、後円部の径約27mと大きく、前方部、後円部とも二段に築成され、墳丘全面に葺石が施されている。竪穴式石室を有し、副葬品には鉄斧、鋤先などの鉄製品がある。

山地古墳は神西湖に隣接する東側丘陵の標高約28mの尾根上に立地する前期後葉の円墳である。不整形であるが径約24mの規模を測り、墳丘全面に葺石が施されている。埋葬施設は3基確認され、

このうちの2基は礫床を有する木棺と箱式石棺である。これら主体部内から筒形銅器、二神二獣鏡、珠文鏡、碧玉製管玉等の豊富な副葬品が出土している。また、墳裾から壺棺も検出されている。

浅柄Ⅱ古墳は浅柄北古墳の南方約300mの丘陵上の標高約63mの尾根上に立地している。墳丘の形態や規模については不明である。埋葬施設は礫床を備える粘土槨と礫槨の2基が並行して築かれている。粘土槨から小形の鉄剣1点が出土しており、この鉄剣と埋葬施設の状況から前期中葉～後葉に位置づけられている。

間谷東古墳は浅柄北古墳の500m西方の標高約42mの丘陵尾根上に立地する。墳丘の形態や規模については不明である。埋葬施設は「奥



第150図 出雲平野の前期古墳位置図